

IPSHU 研究報告シリーズ
研究報告 No. 32

峠三吉資料目録

松尾雅嗣・池田正彦 編



October, 2004

広島大学平和科学研究センター
730 0053 広島市中区東千田町1-1-89
TEL 082 542 6975
FAX 082 245 0585
E_mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL: <http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/>

IPSHU 研究報告シリーズ
研究報告 No. 32

峠三吉資料目録

松尾雅嗣
広島大学平和科学研究センター

池田正彦
広島文学資料保全の会



目次
(クリックしてください)

[表紙](#)

[まえがき](#)

[資料分類と凡例](#)

[資料目録目次](#)

峠三吉資料目録

編者

松尾雅嗣

広島大学平和科学研究センター

池田正彦

広島文学資料保全の会

峠三吉資料目録

以下の青字の各項目にリンクできます

1 自筆草稿類	3
(1) 詩	
(2) 小説・童話	
(3) 短歌・俳句	
(4) 評論・主張	
(5) 台本・シナリオ類	
(6) 絵画類(習字含む)	
2 日記類	4 0
3 書簡	4 3
(1) 峠三吉差出	
(2) 峠三吉宛	
(3) 峠和子関係	
A 峠和子宛	
B 峠和子差出	
4 蔵書	8 1
5 雑誌・同人誌	8 4
(1) 峠関係：峠三吉編集、発行、峠作品掲載、峠作品紹介、批評、言及等あるもの。	
(2) その他雑誌・同人誌	
6 新聞・機関紙類及び切り抜き	1 0 3
(1) 生前	
(2) 没後	
7 文化活動	1 1 4
(1) 青年文化連盟関係	
(2) Y M C A 関係	
(3) 瀬戸内海文庫関係	
(4) 『地核』関係	
(5) 『新日本文学会』関係	
(6) われらの詩の会	
A 関係資料	
B われらの詩の会宛書簡	
C 原稿	
(7) 『原子雲の下より』関係	
A 関係資料	
B 応募原稿	
(8) その他の文化活動・平和運動関係	
A 文書類	

B	投稿原稿類	
C	カット・デッサンなど	
8	履歴関係	154
(1)	履歴関係	
(2)	写真・絵葉書・名刺	
(3)	遺品など	
(4)	告別式関係	
(5)	その他	
9	没後資料	158

資料の分類と配列

資料の分類については、基本的には旧版の分類を踏襲したが、峠三吉自筆の資料を優先することと、今後の新資料追加の可能性も考えて、これを相当に変更した。勿論、本目録の分類や配列が唯一のものではないし、分類の境界が常に明確であるわけではない。また、個別資料についてはどの項目に分類するかが問題になるケースも当然ある。一資料を二箇所に二重記載したのも、利用者の便を考慮したという側面もあるが、多分にこの理由によるものでもある。

われわれの分類は以下の通りである。

1 自筆草稿類

これは、さらに(1)詩、(2)小説・童話(作文含む)、(3)短歌・俳句、(4)評論・主張(宣言類、覚書含む)、(5)台本・シナリオ類、(6)絵画類(習字含む)に下位区分した。

2 日記類(手帳など含む)

3 書簡:電報、グリーティングカードなども含む。

これは、(1)峠三吉差出、(2)峠三吉宛、(3)峠和子関係に下位区分した。大量に残っている「われらの詩」の会宛の書簡などは7の文化活動に含めた。

4 蔵書:図書のみ

ただし、峠三吉の関わった詩集などの図書は、次項「雑誌・同人誌」に記載した。

5 雑誌・同人誌類

膨大な数の雑誌・同人誌類は、生前と没後とに関わらず、(1)峠三吉編集、発行、峠作品掲載、峠作品紹介、批評、言及等あるものと、(2)その他の雑誌・同人誌に区分した。一部は参照の便を考え、双方に記載した。「雑誌・同人誌類」と次項の「新聞・機関紙類」の判別は必ずしも容易ではない。分類に問題ある資料なしとしない。

6 新聞・機関紙類及び切り抜き

新聞・機関紙などの一部が丸ごと保存されているものと切り抜きとは、敢えて区分せず、(1)生前のものと(2)没後のものに二分した。峠及びその作品に言及ある資料はいずれにも含まれる。但し、没後の新聞:機関紙等で、峠三吉及びその作品に言及のあるものは、参照の便を考慮し、9「没後資料」にも併載した。

7 文化活動

峠三吉の多岐にわたる文学・文化活動を明確に区分することは困難であるが、活動母体となった主宰団体と所属団体を基準として、(1)青年文化連盟関係、(2)YMCA関係、(3)瀬戸内海文庫関係、(4)広島詩人協会『地核』関係、(5)『新日本文学会』関係、(6)われらの詩の会関係(これには、われらの詩の会宛書簡、応募原稿を含む)、(7)『原子雲

の下より』関係（応募原稿を含む）（８）その他の文化活動・平和運動関係に大別した。最後の項目には明確に分類しがたい資料が相当に含まれる。なお、評論・宣言・覚書など自筆のものは、原則として「自筆草稿（４）評論・随想」に収録したが、一部については双方に併載した。

8 履歴関係

峠三吉の履歴に関する資料、遺品、告別式関連の資料はここに記載した。（１）履歴関係、（２）写真・絵葉書・名刺、（３）遺品など、（４）告別式関係、（５）その他に区分した。

9 没後資料

峠三吉没後の関係資料をここに分類した。但し、新聞・機関紙類、切り抜きは、上述のように6「新聞・機関紙類及び切り抜き」にも掲載した。

既に述べたようにすべての資料が、この分類に容易に当てはまるわけではない。例えば、ノートなどひとつの綴りになっているものは一括して分類処理するが、「詩集」と題された綴りやノートに「短歌」が入っている場合は、二重記載で相互参照形式とせざるを得ない。雑誌や新聞類の分類も同様である。それゆえ、必要に応じて分類ごとに注釈や説明を付け加えた。

分類した資料の配列は、原則として年代順、あるいは書簡などは人名順とした。一綴りのノートなどに記録されたものについては、記載順に整理したが、これは「詩集」などと題したノートの例を見れば明らかのように年代順になっていない。この場合は、あえて日付順に配置し直すことはしなかった。年代順に配列する場合、年月日を確定できない資料も多く、「不明」として各分類の末尾に置いたが、年代順から言えば問題ありと思われるケースも少なくない。それゆえ、中央図書館資料、東京資料ともに、旧版あるいはマイクロフィルム画像の配列順を優先して、年代を確定できない場合でも、順序を入れ替えずに残したものもある。

凡例

本目録の各資料の記述は、次の項目から構成される。この構成も旧版の内容にほぼ従ったものである。

- 1 資料番号
- 2 資料名

- 3 資料詳細
- 4 日付
- 5 形態等備考

但し、『原子雲の下より』応募原稿については、「資料番号」(後述)、「題名」、「筆者」のみとした。

それぞれの項目に記載する内容については、旧版掲載分は、明らかな誤植や誤謬を除き、ほぼ全面的に旧版の記載を採用した。他の資料については、われわれが新たに確定し記載した。

(1) 資料番号

本目録の資料番号は、アルファベット1文字と4桁の数値から成る。最初のアルファベット大文字は寄贈者・保管者を示す。

M：三戸頼雄・今井千栄子氏寄贈資料

K：好村富士彦氏寄贈資料

O：尾津訓三氏寄贈資料

I：池田正彦寄贈資料

G：『原子雲の下より』応募原稿

- 以上、広島市立中央図書館所蔵 -

T：峠鷹志氏所蔵資料(東京資料)

S：坂田(旧姓平岡)和子氏寄贈、保全の会保管の資料

これに続く4桁の資料番号は、中央図書館資料については旧版の資料番号を、東京資料については、前掲池田・松尾(編)「峠三吉東京資料目録」の番号を基本的に踏襲した。後者は、マイクロフィルム収録順に従い、われわれが新たに付したものである。『原子雲の下より』応募原稿は、広島市立中央図書館がマイクロフィルムに付した資料番号に従った。

坂田和子氏寄贈資料及び、保全の会保管資料にはこの番号はないので、新たに番号を付した。坂田資料は、独自の番号を付けた。また保全の会保管資料については、池田が保管の責任者でもあることから、便宜的ではあるが、中央図書館の池田寄贈資料番号に続けた。資料番号 I0115 までは池田正彦寄贈資料、資料番号 I0116 以降が保全の会保管資料である。

旧版目録などで枝番が付されているもの、あるいは見落としにより新たな番号を付す必要があるものなどについては、必要に応じて原資料番号にアルファベット大文字(A、Bなど)を付して区別した。

詩誌『われらの詩』など、重複する資料については、すべての資料番号を併記した。

(2) 資料名。

「葉書」と「封書」の別のように明確なものもあるが、手書き原稿、印刷物の場合、「評論」とすべきか「覚書」とすべきか、「同人誌」とすべきか「雑

誌」とすべきか、「機関紙」とすべきか「新聞」とすべきか断定の不可能なものも少なくない。資料名は、ごく大まかな目安と理解されたい。

(3) 資料詳細

資料の内容を具体的に記す。ルビは原文にあるもののみに付した。また、判読不能の文字は で示した。

(4) 日付

日付は資料から確定できるもののみを示した。原文が西暦を使用している場合も含め、年(元号2桁) 月(2桁) 日(2桁)で示す。XXは不明を示す。大正と平成については年の前にそれぞれ T, H を付した。月日及び日のみ不明の場合は、それぞれ年のみ、年月のみ示す。

書簡については消印より本人の記載を優先した。

(5) 形態等備考

旧版に記載のあるものはそれを採用した。資料の詳細の補足、編者の註などを記した。

まえがき

現在確認されている峠三吉関係の資料の大半は、広島市立中央図書館¹⁾と峠鷹志氏によって所蔵されている。広島市立中央図書館所蔵分(以下、中央図書館資料と略称)と峠鷹志氏所蔵分(以下、東京資料と略称)は、いずれもほぼ全点マイクロフィルム化され、フィルムは広島市立中央図書館に保管されている。勿論、このほかに他の個人所蔵資料や未確認資料が存在することは言を俟たない。例えば、今回新たに目録に加えた広島文学資料保全の会(以下、保全の会と略称)が保管する資料などもその例である。

とはいえ、確認された資料についても、中央図書館資料が『峠三吉資料目録』として整理され、平成2年3月31日に僅か50部刊行された²⁾のみで、東京資料については、大部分が貴重な自筆原稿であるにもかかわらず、長く未整理のままであった。加えて、上記両資料を併せても、重要な資料の欠落がある場合もある。例えば、峠三吉が主宰した詩誌『われらの詩』の全号は揃わない。古井誠三氏から寄贈された保全の会保管資料を合わせて漸く全巻が揃う³⁾。この意味で新たな資料の収集と整備が望まれることは明らかである。

このような状況に鑑み、われわれは、平成15年度前期広島大学研究支援金「原爆文学を中心とした広島原爆資料の目録作成と電子化の研究」(研究代表者:松尾雅嗣)の助成を受けて、中央図書館資料と東京資料を合わせ、さらに追加資料を加えて、既存全資料の統一的目録を作成するとともに、資料のデジタル化、電子化の試みを始めた。

上述の如く新たな資料の収集と整備の必要性は言うまでもないが、われわれの作業の出発に当たって、既存資料の整理についても重要な課題が積み残されていたのが実情である。東京資料がまったく未整理であったわけではないが、既に述べたように目録すらなく、どのような資料があるのかという情報すらないのが実情であった。中央図書館資料についても、完全な目録ができていたとは言えない。例えば、峠三吉は1952年に詩集『原子雲の下より』(青木書店)編集、刊行したが⁴⁾、広島市立中央図書館刊行の『峠三吉資料目録』(以下、旧版と略称)には、同書出版に関わる資料が、資料2332-2406に

収録されているのみである。応募原稿は、広島市立中央図書館に所蔵され、マイクロフィルムにも撮影されている（広島市立中央図書館所蔵マイクロフィルム、リール番号35、36）ものの、『原子雲の下より』掲載作品と、補遺として刊行された詩集『行李の中から出てきた原爆の詩』（1990年・暮らしの手帖社）掲載作品を除けば、その全体も詳細も知られることがなかった。

確かに、峠三吉の作品については、峠自身が編んだ『原爆詩集』（峠三吉著 青木書店、昭和27年）『にんげんをかえせ・峠三吉全詩集』（且原純夫解説 風土社、昭和45年）『峠三吉作品集 上・下』（増岡敏和解説 青木書店、昭和50年）などが刊行されている。また残された資料についても、評伝『八月の詩人』（増岡敏和著 東邦出版社、昭和45年）をはじめ、上記作品集から作品、日記、随筆、覚書などの一端を窺うことができる。しかしながら、いずれもページ数などの制約から部分的な紹介にとどまり、資料全体の情報は旧版目録が唯一の手がかりと言えるものであった。ましてや、一部の人を除けばこれらの資料へのアクセスは叶わず、峠三吉研究にとって大きな弊害となってきたことは否めない。

われわれが既存資料を整理し、新たな総合的目録を作成することを第一の目的としたのは、このような理由からである。そして目録作成の第一段階として、まず東京資料の目録作成を行ったのも同じ理由からである。

東京資料に含まれる峠三吉自筆の日記、詩作、随想、俳句、短歌などは従来ほとんど整理・検討が加えられてこなかったものであり、峠三吉研究にとってきわめて重要なものと思われる。われわれは、約850点⁵⁾の資料を整理し、池田正彦・松尾雅嗣（編）『峠三吉東京資料：峠資料電子化の文脈で』（広島大学平和科学研究センター『広島平和科学』26号，pp. 101-131）としてその網羅的目録を作成、公表した⁶⁾。旧版と対照すれば東京資料に如何に重要な資料が含まれているかは明らかである。

これと並行して、われわれは旧版で目録に採録されていない『原子雲の下より』の応募原稿の目録を作成した。広島市立中央図書館には、峠らの呼びかけに応じて応募した原稿のうち、三戸頼雄氏より寄贈された約500点が所蔵されている。因みに、応募原稿の総数は1389編⁷⁾とされるが、この500余

編を除く、他の応募原稿の所在は不明である。われわれは、広島市立中央図書館所蔵の応募原稿を整理し、前述の『原子雲の下より』収録、『行李の中から出てきた原爆の詩』収録、いずれにも不採録の別を示した応募原稿目録を完成し、池田正彦・松尾雅嗣（編）「峠三吉編詩集『原子雲の下より』応募作品総目録」として私家版で公刊した。この目録はほぼ同じ形で本目録にも収録した。

本目録は、このような経緯を経て完成したものである。本目録は、中央図書館資料と東京資料に、広島文学資料保全の会が保管する資料⁸⁾を加えた、現在までに確認されている資料をほぼ網羅するものである。中央図書館資料については、旧版に依拠したが、明らかな誤認、誤植などはできる限り原資料に当り修正した。

この目録は二次情報であり、飽くまで資料の所在を示すものに過ぎない。研究者、関心のある学生、市民にとって真に有用なのは、資料そのもの、即ち一次情報である。われわれが資料のデジタル化、電子化を目的として掲げたのは、この故である。多くの人々が直接に資料の現物を検討することができればそれに越したことはないが、現実にはさまざまな障害が存在する。それを克服するひとつの方法が資料をデジタル画像として提供するという方法である。資料をデジタル化し、これをCDあるいはDVDといった媒体によって提供することにより、多くの関心ある人々にとって資料へのアクセスの問題は大幅に改善できるからである。中央図書館資料、東京資料ともにほとんどすべてがマイクロフィルムに撮影されているので、われわれは今、これをデジタル化し、また他の資料もスキャナーを介してデジタル化する作業を進めている。これまでに、中央図書館資料については、峠差出、峠宛の書簡類、峠自筆の日記、草稿、ノートなど峠の生涯と作品に密接な関わりをもつ資料を中心にマイクロフィルム画像をデジタル化した。また、中央図書館所蔵の詩集『原子雲の下より』の現存する応募原稿もすべてデジタル化した。マイクロフィルムに撮影されていない好村富士彦氏寄贈資料なども、併せてスキャナーを利用してデジタル画像とした。また、東京資料については、そのすべてをマイクロフィルム画像からデジタル化した。その他の資料についても、広島文学資料保全の会保管の詩誌

『われらの誌』全号、『反戦詩歌集』1、2、坂田（旧姓平岡）和子氏寄贈資料などをデジタル画像として記録した。

資料のデジタル化のメリット、特に峠三吉研究にもたらす新たな可能性については既に他の箇所でも触れたので⁹⁾、ここでは取り立てて論じない。これらのデジタル画像については、本資料目録にデジタル化した画像を加えて、必要資料を迅速かつ容易に画面で見ることのできる形で、例えばハイパーテキスト化した形で、できるだけ早い機会に完成し、CDなど記憶媒体やインターネットを介して公開する予定である。しかし、現実にはいくつかの権利に関わる問題があり、すべての資料の画像を無条件に公開できるものではない。公開のためにはこの点の慎重な検討も必要である。

このような試みのひとつとして、電子媒体ではないが、昭和20年8月6日直後の峠三吉の日記の写真画像を、近く冊子体で刊行する予定である¹⁰⁾。

デジタル化の完成の後には、テキスト化の課題が存在する。手書原稿を活字として起こす作業である。これはわれわれの時間と能力をはるかに超える作業であり、ここでは将来の課題として指摘するにとどめるが、この作業のためにもデジタル画像が大きな助けとなることは確かであろう。

本目録は小さな最初の一步に過ぎない。多くの欠点、誤謬、誤認もあろう。読者諸氏のご叱正と、ご批判を仰ぎたい。しかしながら、この目録が、将来の峠三吉研究、ひいては原爆文学、戦後広島文学・文化活動、原爆被害という未曾有の惨事を体験した地域とそこに生きた人々の営みの、研究の一助となれば、編者にとっては望外の幸せである。

2004年10月

編者

松尾 雅嗣

池田 正彦

註

- 1 広島文学資料保全の会が寄贈の仲介をしたものである。
- 2 広島市立中央図書館発行。発行部数は同書奥付に拠る。
- 3 『われらの詩』は昭和24年(1949年)から昭和28年(1953年)にかけて第20号まで刊行された。但し、第7号は発行されず、第8号(昭和25年)が、7・8号の事実上の合併号として発行され、全19冊である。
- 4 正式な編者は、峠三吉と原爆の詩編纂委員会である。
- 5 例えば「詩集」や「歌集」と峠の題したノート1冊を1点と数えるのではなく、ノートに書かれた詩や随想をすべて個別の資料として掲載した数字である。ただし、短歌、俳句については表題ごとの連作をまとめて1点とした。
- 6 この論文と、その大半を占める東京資料の目録は、次のウェブサイトで見ることができる。<http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/JNL/26/ikematsu.htm>。また、目録自体は、すべて本目録に組み込まれている。
- 7 昭和27年7月16日付『「原爆の詩」応募に対する礼状』(資料番号M2363、本目録7(7)Aに収録)参照。
- 8 この資料は将来広島市立中央図書館に寄贈する予定である。
- 9 池田正彦・松尾雅嗣(編)「峠三吉東京資料：峠資料電子化の文脈で」、『広島平和科学』(広島大学平和科学研究センター), 26, 104-109 参照。
- 10 これをCDで公開するかどうかは現在検討中であるが、ウェブサイトでは公開の予定である。

謝辞

本研究には、平成15年度前期広島大学研究支援金「原爆文学を中心とした広島原爆資料の目録作成と電子化の研究」(研究代表者:松尾雅嗣)(187万円)の支援を受けた。

また、峠三吉著作権継承者である峠鷹志氏と、マイクロフィルム版の所蔵者である広島市立中央図書館には資料閲覧とデジタル化に際しお世話になった。

広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期の深林真理さん、前田さららさん、橋本金平さんには資料のデジタル化でお世話になった。

ここに記して感謝の意を表したい。